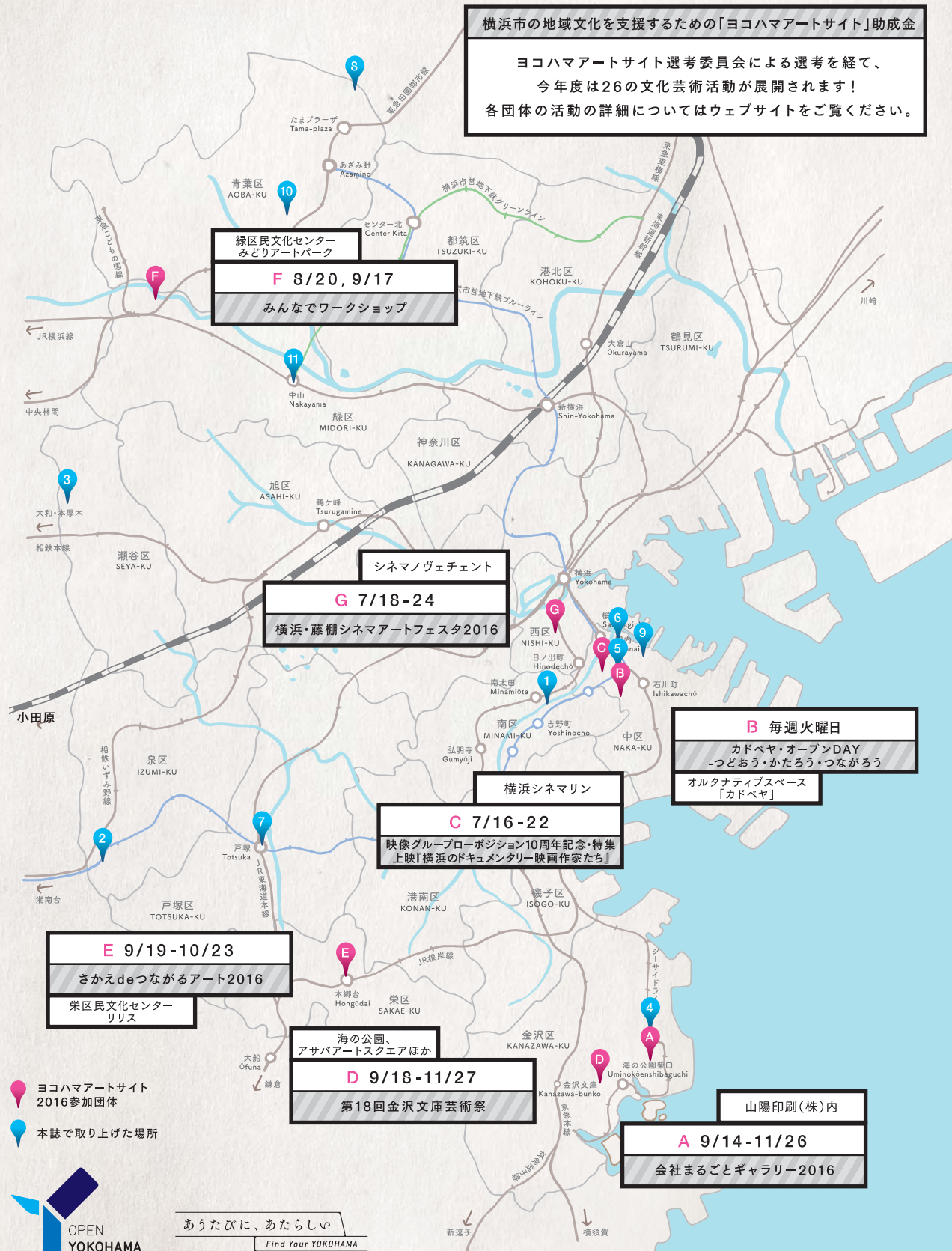


YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2016参加団体による
7月～9月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。

横浜市の地域文化を支援するための「ヨコハマアートサイト」助成金
ヨコハマアートサイト選考委員会による選考を経て、
今年度は26の文化芸術活動が展開されます！
各団体の活動の詳細についてはウェブサイトをご覧ください。

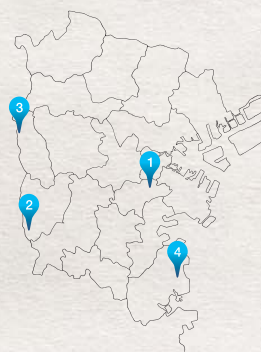


ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する



瀬谷区・境川中島橋



わたしは
川と
育ってきました



1
手作りの
イルミネーションが
照らし出す

12月中旬。夜が近づく頃、南区・蒔田公園周辺にぼつりぼつりと明かりが灯り始める。大岡川アートプロジェクト「光のぶるむなあと」のはじまりだ。2008年にスタートしたこのアートプロジェクトは、吉野町と南太田の間を流れる大岡川周辺に光の回廊をつくり、川で人を繋いでいく試みだ。地域住民とアーティストでつくりあげるキャンドルナイトと、大きな光のオブジェ・ペットボトルツリーが夜の公園

を照らし出し、水辺のステージではライトアップされた高架をバックにライブやパフォーマンスで盛り上がる。観客は屋台のホットドリンクを片手に、白い息を吐きながら、今年も冬の風物詩を楽しんでいた。

アートディレクターを務めるふじたおさむさんは、幼いころから大岡川に親しんできたという。「鯉を釣って遊んだこともありますよ。怒られるのでこっそりと。親の世代では大雨が降ると溢れて、しょっちゅう床下浸水していたみたいです」。護岸工事により氾濫の心配はなくなったが、同時に川への馴染みも薄らいできた。歴史に

よって移ろい続ける風景をどう見つめているのか。「その場所がもつ要素をそのまま生かしたいんです。例えば、川の上にかかっている高架はその暗さを利用して映像を映し出したり、欄干を照らすオブジェの材料にペットボトルを使ったり。長く続けていくためにも、常に現代のあり方を見て、今だからその魅力を発信することが重要なんだと思います」。年を重ねるごとに参加者も作品も増えていき、初年度は500個だったキャンドルも、今では5,000個を越えた。人と川とアートを包む柔らかな光がここには灯っている。



右 南区・大岡川アートプロジェクト「光のぶるむなあと2015」/P.2 アートディレクター ふじたおさむさん

2

こんぴらさんが 見守ってきた 400年の暮らし

かつて相模国と武蔵国の国境だった境川。暴れ川でもあり、周辺地域は度重なる氾濫に苦しめられたという。1590年、水害に窮した東泉寺は、高台へ移築される際に鎮守として水難守護治水の神である元木琴平社を勧請した。落語でもおなじみ、「九日十日」が縁日のこんぴらさんだ。元木琴平社では、今も毎月10日に月の当番が参詣者に供物を配るという風習が残っている。



「今は羊羹に代わったけど、昔は半紙を三角に畳んだ中に小豆飯が包んであったんだよ。家に帰ってそれを家族で少しずつ押し頂くんだ」。氏子である大川武夫さんは語る。秋の例祭へ向けた太鼓の稽古のため、子どもたちが集まってくる。一時途絶え、40年ほど前に復活したというその調べを背に、子どものころに見た神輿の行列も復活させたいと大川さんが笑った。

「泉区小史」によれば、江戸前期まで境川は境というよりも地域の中心であった。生活・文化の交流も盛んで、橋の普請は兩岸の地区が一年交替で行っていたという。



3

泳げないなら 泳がせよう

瀬谷区・境川中島橋に鯉のぼりが泳ぐようになったのは2010年。子どもたちにふるさと意識を持って欲しいという願いで、区民が主体の「せや かつぱの会」によりスタートした。ずらりと並ぶ鯉のぼりの数々。よく見てみると色とりどりの手形で模様を付けたものや、メッセージやイラストが描かれているものもある。これらは、近隣の小中学校や放課後キッズクラブでそれぞれ制作された手作り鯉のぼりだ。



実行委員会代表の奥津敏雄さんは、これが川を身近に感じるきっかけになればと語る。「私は境川で平泳ぎを覚えたくて。仲間と遊びながら泳ぎ方を教え合っただけです」。今年は、学校を含む10の団体と一般公募の親子が鯉のぼり制作に参加した。近隣の学校から、来年は是非参加したいと声をかけてもらうようになった。7月には地元の竹を利用したいかだ体験も企画し、川と共に季節を楽しむ機会を設けている。

4

港町ヨコハマは 川のまちに 支えられていた

横浜の伝統工芸の一つである横浜スカーフも、川と深い関係がある。1859年の横浜開港より、輸出の目玉であった生糸や絹織物だが、市場拡大と共に染色技術も向上。1930年代にはスカーフがヨーロッパを中心に流行し、いつしか横浜の特産品となった。

染められた布地は、余分な糊を落とすため水洗工場へ送られる。この水洗作業は港に近い川で行われ、1950年頃には川沿いに工場が軒を連ねた。「当時は大岡川や帷子川の水が染料で赤や青に染まると聞いています」と語るのは金沢区・工業技術支援センターの草野誠子さん。ここには約11万点のスカーフ資料が保管されている。

すべて輸出用につくられたものだが、仕向先の中には沖縄も含まれていて、時代を感じさせる。さらに一枚一枚めくっていくと、漫画のようにストーリーがある柄や、昆虫柄、土産物だろうか名所の絵が大きく描かれたものなど、実に多様だ。中にはみなとみらい線の座席の柄として採用されたものもある。川からはじまった文化は、今も生活の中に息づいている。



P.3左 泉区・元木琴平社
P.3中上・下 瀬谷区・境川中島橋
P.3右 金沢区・工業技術支援センター



【会場】横浜市技能文化会館 音楽室(中区万代町)【ゲスト】横山千晶(居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会)／小川美紀雄(元横浜愛泉ホーム職員)
【主催】ヨコハマアートサイト事務局

5

居場所から見る 地域福祉と アートの関わり

第9回のゲストは、前号の特集「居場所で出会う」で紹介したカドベヤ代表の横山千晶さんと、元横浜愛泉ホーム職員である小川美紀雄さん。横浜愛泉ホームは、05年まで南区の中村地区にあった地域福祉施設です。「地域の中に縁側をつくらうとしていたのかな。正面玄関じゃなくて、ちょっと裏側から入って、お茶飲みながらなんでもない話をするような」と小川さんが当時は振り返ります。「さらに、そこで自分や相手を知るきっかけとしてアートがあるといいなと思うんです」と話すのは横山さん。「アートは、生きていくことの喜びを取り戻すための、ある技術だと感じています」。



【会場】YCC ヨコハマ創造都市センター(中区本町)3F【ゲスト】松本道雄(認定特定非営利活動法人市民セクターよこはま 理事)／鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ 取締役)【主催】ヨコハマアートサイト事務局

6

一年間の活動のしめくくりとして、ヨコハマアートサイト2015報告会「地域文化と29のアートな視点」が3月12日にYCCヨコハマ創造都市センターで開催されました。ゲストの松本道雄さんは、空撮映像から紙芝居まで飛び出す、工夫を凝らした報告に「横浜の中での様々な地域性を取り入れて、特色のある活動が行われていることに改めて感心した」と話しました。

それを受けて、鈴木一郎太さんは「いずれの活動も、生活者や住民としての視点と、プロジェクト運営者の視点が切り分けられていない。そこに面白さがある」と応じていました。

新年度のアートサイト参加事業には、過去最高となる56件の応募があり、26事業が行われます。情報共有のための会議も行われ、本格始動は間近に迫っています。採択団体の情報はウェブサイトをご覧ください。

7 文化の中継役として
同時多発の動きを
ゆるやかにみつめる

田中啓介さん
(戸塚区民文化センター さくらプラザ)

戸塚の歴史を探るために、開港資料館にこもって調べ物をしていることもありですね。今度は郷土史家の方にもお話を伺う予定です。

今は知らない人も多いようですが、戸塚はもとも鎌倉郡の一部でした。鎌倉文化圏としての歴史遺産が多く残されているんですよ。富塚八幡宮はもちろん、鎌倉幕府の倒幕に貢献した後醍醐天皇の第一皇子である護良親王を祭った王子神社も残っています。時代を下った江戸時代には、東海道の宿場町・戸塚宿として栄えました。現在の戸塚駅前も当時にぎわいの中心だったようで、本陣もこの近くにあったと聞いています。

鎌倉ハムといえば鎌倉みやげだと思っ
ていますが、もともとは明治初期に戸塚の柏尾地区に建てられた工場が発祥です。このあたりは居留地の人びとがハイキングに来ていたそうなんです。その中の一人であるカーティスというイギリス人が、戸塚に移り住んで居留民のためにハムを作って売り



始めた。つまり本当は戸塚ハムなんです(笑)。戸塚というのは、古都鎌倉と文明開化でひらけた横浜、両方の文化が色濃く反映されているところなんだと感じます。

私たち戸塚区民文化センターさくらプラザは開館3周年を迎えます。情報誌「SAKURA」では区内のいろいろな場所や活動を紹介しています。去年は、舞岡の果樹農園・かねこふぁーむに、戸塚のガールズバンド「THE LEAPS」と梅のもぎとり体験へ出かけました。ここはアトリエにもなっている喫茶店が併設されているんですよ。

地域コミュニティに向けたアートイベントを展開する善了寺、カフェテラ・テラや、戸塚駅東口でのライブイベント・戸塚フリーステージの裏方を担っている純喫茶モネ、区内唯一の銭湯として生活文化を支えている矢部の湯など、魅力的な場所はいっぱいあります。

さくらプラザとしては、個々の小さなコモンズ(入会地)に出入りさせてもらうことが重要だと考えています。その上でハブとしての役割、中継を取り持つ係を担いたいのです。文化的な活動をしている人たちをとりまとめて「さくらプラザに集まれ!」というわけでなく、それまでのそれぞれの活動を尊重したいと考えています。

必ずしも、まち全体という視点をもった活動でなくたって構わない。それぞれがいいと感じること、地域に貢献できることを、たとえ小さくても続ける。それがあちこち同時多発で起こっているという状況が大切なんだと思います。

事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も、横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

8 5月15日(日)

たまプラーザの百段階段をのぼった先、市立美しが丘小学校体育館で開催された『育ちあい2015「GUMBO/ガンボ」ドキュメンタリー映画上映会』へ。会場には子どもたちをはじめ多くの出演者がお出迎え。昨年秋に行われた120人のダンスパフォーマンスでの悪戦苦闘の舞台裏記録が、公園のいちょう並木の風景とともに収められていた。



10 5月22日(日)

青葉区・青葉公会堂にて「第30回青葉区民謡民舞会大会」。客席は着物を着こんだご婦人でいっぱい。明るめの場内では、めくりの札がめくられるたびに音楽に合わせて「がんばってー!」「待ってました!」など客席のあちらこちらから歓声や声掛けが起こる。パンフレットによると、終了後には花の苗が配られるらしい。



9 5月13日(金)

新緑の風に誘われて、大通りをうろうろ。中区・横浜都市発展記念館では『横浜山下公園・海辺に刻まれた街の記憶』が開催中。現在はデートコースとして知られる山下公園の歴史に、海の中に人工地盤を作り海に広がっていく海上公園計画もあったと知り、びっくり。「横浜アメリカ文化センター」の活動も盛んだったようだ。



11 5月30日(月)

昨日までの暑さが嘘のように今日は朝から空気がひんやりとしている。この春にリニューアルオープンした緑区役所のエントランスでは、みどりぶんぶんマルシェが開催中。昨年度からヨコハマアートサイトに参加しているNPO法人ぶかぶかのカラフルな看板に誘われ、ほうじ茶クッキーとガーリックのラスクを購入。



ヨコハマ
アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決につながる文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける文化芸術活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
(STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団)
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜STビル 208
(NPO法人STスポット横浜
地域連携事業部内)
TEL:045-325-0410
FAX:045-325-0414
WEB: <http://y-artsite.org>
MAIL: office@y-artsite.org

@Y_Artsite

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関するを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.008

発行 ヨコハマアートサイト事務局
編集 NPO法人STスポット横浜
テキスト 小川智紀 池田友実
デザイン 相澤事務所
撮影 福井裕子
印刷・製本 合資会社 三島印刷所
発行日 2016年06月30日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。